飯盛城絵図

『飯盛城は高いといえば雲に聳えるようであり、
後は古木が生い茂って陰をつくり、
東は岩石、麓は大河、西は青い海が満々としており、
そのほか堀には水をたたえ、
香椎川、西方寺口の辺りまで、要害厳しく固めていたので、
容易に攻撃する手段もなかった。』

印山記より

飯盛城関連年表

享禄三年（1530）	小弐氏が田手畷の戦いで大内氏に勝利
享禄四年（1531）	小弐氏の動きで宗家松浦は旧領を回復する
天文四年（1535）	飯盛城完成　宗家松浦16代親 入城 小弐資元自害
天文十一年暮れ（1542）	平戸松浦による一回目の飯盛城攻め
天文十二年一月（1543）	有馬氏が仲介して和睦
永禄三年（1560）	宗家松浦　有馬より盛を養子に迎える
永禄六年八月（1563）	平戸松浦による二回目の飯盛城攻め
永禄八年（1565）	平戸松浦と宗家松浦の和睦 平戸より九郎を養子に迎える
天正二年六月（1574）	宗家松浦17代親（九郎）が家臣の東甚助時忠と差し違えて没する
天正五年九月（1577）	宗金親 没する
文禄二年（1593）	宗家松浦18代定 朝鮮の役にて戦死
元和一年（1615）	一国一城令により飯盛城は破壊される

宗家松浦16代当主宗金親による飯盛城の築城から一国一城の令によって取り壊されるまでの約80年間飯盛城は愛宕山のどこかに実在していた。

堅固な山城で平戸松浦の鉄砲を使った攻撃にも耐え武力での落城はなかったという。しかし長い兵糧攻めと周辺勢力の劣勢から養子を迎える形で和睦する。

現在でも古書による記録や地元の古い地名や言い伝え、各箇所に残る石塁や石塔そして地形などから当時の様子を想像することはできる。

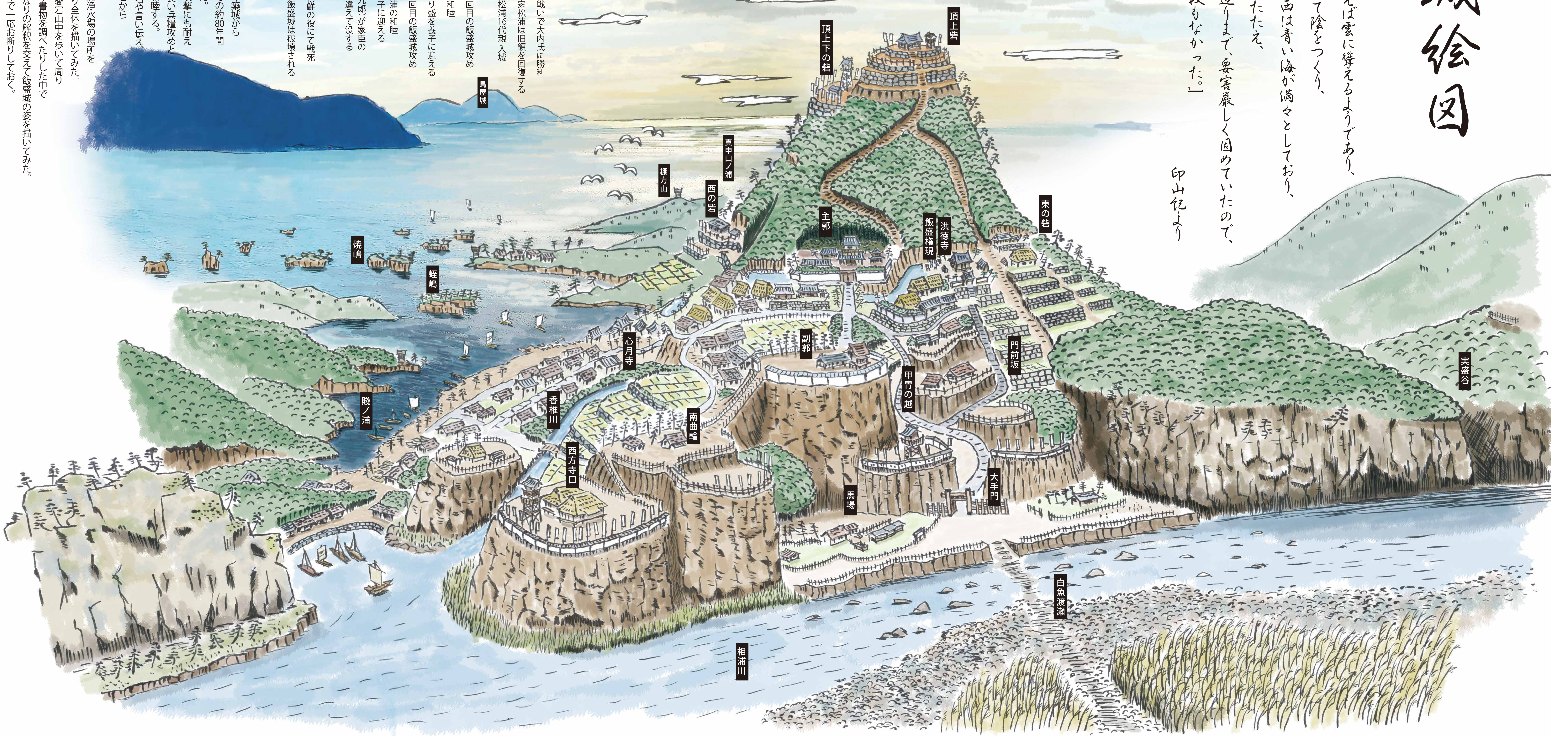
この絵図では愛宕山東南側中腹の水道局浄水場の場所を飯盛城の主郭として、そこを中心に縄張り全体を描いてみた。

飯盛城の所在地については諸説有るが、愛宕山中を歩いて周り地元の方々に話しを聞いたり諸先輩方の書物を調べたりした中で現在知り得る限りの情報を反映し、自分なりの解釈を交えて飯盛城の姿を描いてみた。

そのためこの絵図に科学的根拠はないので一応お断りしておく。

この絵図を見て少しでも当時の姿を思い描いて楽しんでもらえれば幸いである。

令和2年5月1日　佐世保史談会　垣田鉄郎



白魚渡瀬（しらごわたせ）

（現在地　飛び石）

当時この辺りは川幅が狭く現在の半分もないほどで、大雨以外通常は馬で渡れるほど浅かった。遠藤但馬守が襲われた場所でもある。半坂峠を突破した平戸松浦は拝別当（現在の下本山交差点付近）で川を渡り陸路を通ってここから攻めた。拝別当から飯盛城までの川岸は絶壁の崖に阻まれ進入不可能。東南側（絵図の左下）から先は当時は広大な入り江が拡がっていたため、陸から攻めるにはこの場所しかなかった。古書の記録にある平戸方による川岸からの鉄砲を使った攻撃もこの場所ではないかと思われる。弓矢や弾丸が飛び交う激しい戦いがこの場所で行われた。

大手門

（現在地　登り口）

絵図のような門があったかは不明だが両脇を急峻な崖に挟まれた狭い入り口は門を置くのにうってつけだと思われる。この辺りから愛宕山の東南側一帯の小字を「門前」という、洪徳寺などに由来すると思われるが飯盛城の大手門があったとしても面白い。

馬場

（現在地　愛宕山方面に飛び石を渡り上がった左手の平場）

馬場の跡と伝えられる場所。この辺りに現在の木宮神社の前身があったとの説もある。

甲冑の越（かっちゅうこし）

現在は「甲冑の越」と「門前坂」との間に「鳥居坂」と呼ばれる旧飯盛古社（現・長田邸の奥）に続く参道跡の道があるが、この時代にはまだ無く、「甲冑の越」を主要道路として使っていた。江戸時代にはそのまま街道となり、中里から賤の浦に抜ける主要道路として現在の飛び石が整備され、人が頻繁に往来していた。

門前坂（もんぜんざか）

飯盛城創建以前からあった洪徳寺へ続く参道。かなり古い参道だが今もその風情を残している。

洪徳寺（こうとくじ）

（現在地　門前坂を上りきった奥の平場）

元々洪徳寺はこの場所に室町初期に開山されていたが5代目の住職以降断絶しており、平戸との戦の期間中は廃寺の状態だったと思われる。平戸松浦と宗家松浦が和睦した年でもある永禄8年に中里村本山にあった宗家松浦の菩提寺である「曹洞宗新豊寺」がこの場所に移される。それ以前にあった「臨済宗洪徳寺」の寺号のみを引き継ぎ「曹洞宗洪徳寺」として新たに創建された。事実上平戸の支配下に置かれたこの地の新たな宗教上の一拠点として創建されたと思われる。その後、明治政府の神仏分離令により明治5年にそれまで竹林寺があった現在の場所に移った。現在も境内にあった池の跡など、その名残を残している。

飯盛権現（いいもりごんげん）

（現在地　鳥居坂を上りきった奥の平場）

現在の飯盛神社の前身。天正8年にそれまで小野にあった「熊野権現」を分霊し、「飯盛権現」として洪徳寺境内に移した。洪徳寺の再建と同様に、平戸の支配下となった後の宗教上の拠点としたのだろう。また永きに渡った戦いでの犠牲者への鎮魂の意味もあったと思われる。飯盛権現には宗家松浦当主親子の像を御神体として祀ってあったとされる。支配された側の当主を祀るなど不可思議だが、新しい領民への気遣いがあったのかもしれない。事実、飯盛権現が移される6年前の天正2年には平戸から来た新しい領主（九郎親）が旧宗家松浦の家臣と差し違えて没するという不穏な事件が起きている。

実盛谷（さねもりだに）

（現在地　愛宕山の北東側、現在高速道路が通っている辺りの谷）

平成9年市教発行の「武辺城跡発掘調査報告書」の記述によると実盛谷と本山トンネルの間にある尾根の付近に造成された平場跡があり、周辺には石塁も見られるという。半坂を突破した平戸方が、拝別当で川を渡らず丘陵を越えてきたときに応戦する砦があったのかもしれない。しかしそのルートは起伏の激しい地形で、当時としてもかなり険しい道のりだったと思われる。おそらく平戸方の大半は大曲記の記述にあるように、拝別当で川を渡り陸路を通って白魚渡瀬の河原から攻めたのではないだろうか。

東の砦（とりで）

昭和56年市教発行の「中世山城分布調査報告書」ではこの場所を飯盛城としている。現在でも階段状に大規模な古い石塁がみられ、斜面に沿った土塁跡も見てとれる。通称ミカン畑とも呼ばれる場所で、城跡を後世に畑として利用していたのか、それとも中世から畑として利用していたのか疑問である。

この絵図では最上段の平場を東の砦として、下の階段状の石塁は畑と想定して描いている。

副郭（ふくかく）

（現在地　木宮神社がある平場）

平成9年市教発行の「武辺城跡発掘調査報告書」の中で吉福氏はあくまで私見として「飯盛城の中心が木宮神社から門前にかけての一体にあったことが想像できる」としている。吉福氏は周辺の山城の特徴を残した遺構などから推測されており、確かに印山記の文面とも位置的に当てはまる場所で現在最も有力な説かもしれない。しかし現在神社のある平場に限って言うと、主郭があったにしては手狭であり、主郭を置くならばやはり奥まった場所ではないかとの私なりの推察から今回は副郭とした。だがこの場所は川岸と中里方面の平地を見渡せる絶好の地であり、何らかの重要な施設があったのは間違いないと思われる。木宮神社は相浦谷の開拓の祖といわれる武辺胤明を祀ったと伝わる神社で元々は相浦川河畔にあったが、後に胤明の遺言に従い相浦谷を一望できるこの場所に移したのが江戸時代だとされる。したがって飯盛城が実在していた頃にはまだ無かったのではないかと思われる。またこの辺りからは古墳も見つかっており、古代から神聖な場所として利用されていたようだ。

主郭（しゅかく）

（現在地　水道局の浄水場）

この絵図ではここに飯盛城と呼ばれる建物があったと想定して描いている。飯盛城跡地ともいわれる木宮神社からは10メートルほど高く山の斜面側の奥まった場所にあり、背後に急斜面の愛宕山を背負う様な位置にある。印山記の「後は古木が茂って陰をつくり」の表現にも合う場所で、「雲にそびえるようであり」とはいささか誇張した言い回しだが、当時の状況からすれば数少ない高地にある建物で川岸から見上げればそのような表現にもなるかもしれない。「東は岩石」（東側川岸一帯の急峻な岩石のこと）「麓は大河」（相浦川）「西は青い海」（南九十九島）の表現もこの場所を中心に考えると納得がいく。そして愛宕山で水が湧き出る上限標高50メートルのライン上に位置しており、館を形成するのに十分な広い平場もある。古老の話によると昭和16年第二浄水場の施設が海軍の手によって建設されるときにそれまであった石塁も破壊され古い宝篋印塔なども破棄されたという。また土地の人はここを倉屋敷と呼ぶ人もいて、江戸時代にはそのような屋敷があったのかもしれない。

西の砦（とりで）

（現在地　洪徳寺西側上の天満宮周辺（藪化して進入困難））

明治43年に発行された「佐世保発達史」ではこの場所を飯盛城としている。この絵図では陰になって見にくいが、現在の洪徳寺の西上の谷伝いに階段状の石塁が続きその最上段に天満宮があり、その辺りに飯盛城があったという。平戸方が陣を張った佐々方面からの海上の動きが見渡せる場所で、地形をみると小字でもある「蔵ノ谷」などの複数の谷の頂点に位置し、周辺に堀切や水堀の遺構もあり、山城の雰囲気を残している。しかし印山記の「麓に大河」という記述や、大曲記の「大宮の前まで寄せられたのを城より見て」との記述とは位置的なズレがあることから、この絵図では西の砦として描いた。

昭和50年代頃まで洪徳寺から尾根伝いに天満宮を通って棚方に抜ける間道を使っていたという。おそらく飯盛城が実在した頃から使っていた間道だと思われる。

頂上の砦（とりで）

（現在地　愛宕山山頂）

山頂付近に頂上を取り囲むようにして築かれた多数の石塁が崩された形跡がある。特に北西側を重点的に石積みしているように見える。北西側は平戸方が陣を張っていたとされる鳥屋城と向かい合う方角で、平戸方に向けての牽制の意味もあったのかもしれない。頂上に石塁を築いた姿は壮大で威圧感があり、おそらく遠目から見ればこの山そのものが飯盛城に見えたに違いない。

心月寺（しんげつじ）

（現在地　洪徳寺の北東上（藪化して進入困難））

洪徳寺の末寺。家臣と差し違えて亡くなった九郎親の菩提を弔うために天正2年に宗金親が建立した。平戸の支配下となった後に建立した寺である。

西方寺口（さいほうじぐち）

（現在地　飯盛神社と洪徳寺に挟まれた付近）

以前から洪徳寺住職の隠居寺としての西方寺があったと伝わる場所。しかし西方寺の始まりは鎌倉時代に赤崎岳の北麓に開いた庵で、戦国時代に赤崎伊代守が現在の場所（八幡町）に再興したとも言われている。現在の西方寺とここにあったとされる西方寺との関係性は不明だが、どちらにせよ飯盛城実在時にはすでにここに寺は無く、西方寺口という呼び名だけが残っていたようだ。また印山記でいう「西方寺口」とは「西の方角にある寺」という意味で、実際のお寺名ではないという説もある。

香椎川（かしいがわ）

（現在地　飯盛神社下を流れる川）

通称カセ川と呼ばれる。印山記の一節によるとこの辺りまで要害厳しく守りを固めていたとされる。現在は水量も少なく川幅も狭いが当時は水量も多かったと思われる。現在の飯盛神社の参道は無く、飯盛神社付近の平場の周りは急峻な崖であった。香椎川はその崖下を流れていた。

賤ノ浦（しずのうら）

（現在地　愛宕祭りで露店が並ぶ相浦本通り一帯）

当時は現在の洪徳寺の下あたりまで海水が入り込んでおり、細長く入り込んだ入り江で、その名の通り波のない静かな浦であった。

棚方山（たながたやま）

（現在地　鬼塚神社付近）

海上から攻めてくる平戸方を迎え撃った砦。真申口ノ浦に集結した平戸の兵船を相手に北野源三など宗家松浦の弓の名手が記録に残る活躍をした場所。